

アジア諸国と人権(その四)



研究センター所長
京都大学名誉教授

安藤 仁介

が九割を超え、他の東南アジア諸国と違って、「民族的一体性」が高いといわれています。そしてカンボディアの国土は、大半が肥沃な平地で高地はごく一部に過ぎず、東と南はヴェトナム、西と北の一部はタイ、北の残る一部はラオスにそれぞれ接し、南西部ではタイ湾に臨み、かつて交易で栄えた大きな港町もあります。

ヴェトナム、ラオスに次いで旧インドシナの残る一國、カンボディアの人権状況を見てみましょう。カンボディアの面積は一八万平方キロで北海道の約二倍、人口は千五百万余り、その大半がクメール族でかつ小乗仏教徒です。それ以外は、華僑が50万、ヴェトナム系が40万、原住民のチャム族が12万(宗教はイスラム)で、その他にも採取狩猟、焼畑農業など伝統的な生活様式を維持し高原や山岳部に居住する少数の先住民グループがいます。この数字が示すように、カンボディアはクメール族

このカンボディアの地にいつからどんな人々が定住するようになったのか、はっきりとは分かっていませんが、すでに紀元前四千年にはカンボディア地方で陶器が作られていた形跡があり、またカンボディアを含む東南アジアには高度な文明が発達していて、米の生産もこの地域が起源であるといわれることがあります。いずれにせよ、三世紀ごろ導入されたカンボディア語の表記方法はサンクリット文字を用いており、カンボディア社会におけるヒンズー文化の影響も強いので、カンボディアが早くからインド文明の支配下にあった事実が認められます。この点で興味深いのは「扶南国、Funan」の存在です。

扶南国は、一世紀ころから七世紀前半までカンボディアのメコン河デルタ地域にあった古代王国であり、国名の由来は現地語のブナム(Bram)といわれています。この国はヒンズー教の高僧がインドから来て土侯の娘と結婚して建国した、あるいは既存の政権を發展させたものと伝えられています。歴代の王が努力して近隣を征圧し、最盛期にはマレー半島北部と大ビルマを統治下に置き、北ではチェンラ(Chenla、真臘)を属国とし、ヴェトナムの王国と国境を接するに至りました。しかし、六世紀には扶南国の衰退が始まり、九世紀には台頭してきた真臘に押されて首都を離れ、八〇二年にはアンコール王朝に取って代わられます。

アンコール王朝の始祖とされるのはジャヤヴァルマン2世で、かれはカンブジャデーザと呼ばれた政体を自律的な王国にまとめ、近隣の諸勢力を統合して、カンボディアの政治的基礎をつくりあげました。その後の一世紀余りにわたってかれの子孫は丘の上にピラミッド型の石造

りの王城と寺院を建て、その集合体がアンコール・ワットと呼ばれるようになりました。そのなかでもヤソヴァルマン1世が建て、1キロ四方の壁に囲まれたバケン(強力な先祖)と称される王城・寺院は、世界的な美術的価値を持ち、カンボディア文明の粋を示しています。ついにながらアンコールの語源は、「都市」を意味するサンスクリットです。

アンコール王朝のもとで繁栄したカンボディアは13世紀には現在のタイ(マレー半島の東半分を含む)やヴェトナム南部のホー・チ・ミン(サイゴン)市に広がる大帝國に發展し、文字通りインドシナの中核的な存在となりました。しかし12世紀後半に一時首都を奪われ、14世紀以降タイのアユタヤ朝に攻撃されて永久に首都を失うに至りました。さらにこれに対抗すべく引き入れたヴェトナムのゲン朝に一九世紀半ばには併合されてしまったのです。